

平成21年 6月 13日現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2005～2008

課題番号：17720178

研究課題名 (和文) モンゴル帝国時代初期中国黄河流域支配の政治史・文化史的研究

研究課題名 (英文) Political and Cultural Study on the Rule of Huanghe Basin, China at the First Half of the Mongol Period

研究代表者

櫻井 智美 (SAKURAI SATOMI)

明治大学・文学部・専任講師

研究者番号：40386412

研究成果の概要：

中国河南省済源市・沁陽市（済泲廟・奉仙観・陽台宮・博物館及び市街）における、モンゴル帝国時代の遺跡・建造物の現状及びそこに所蔵される石刻の調査と、その石刻の内容の考察を通じて、モンゴル帝国初期の当地区において実施された政治、特に文化政策の具体的状況を考察し、当地区における施策の重要性を明らかにする。同時に、1990年代の学術雑誌所収の宋～元代石刻関係記事を収集調査して、そのデータベース化を進める。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	700,000	0	700,000
2006年度	164,646	0	164,646
2007年度	535,354	0	535,354
2008年度	600,000	180,000	720,000
年度			
総計	2,000,000	180,000	2,180,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：モンゴル帝国, 中国, 黄河, 河南, 祭祀

1. 研究開始当初の背景

昨今の東アジア研究において、13, 14世紀のモンゴル帝国時代史研究が盛況であることは、各種の学界展望の類で指摘されているところである。その大きな理由は各種の版本類の発見と、それらによる旧知の史料の再評価である。櫻井はこれまでモンゴル帝国治下の中国について研究をしてきた。特に、元代江南の政治と文化人についての問題を一貫して扱ってきたことによって、南宋～元～明という3つの王朝治下の中国南部の変化について概観し大まかな見通しを立てた。

その一方で、中国北部の支配についての日

本の研究を振り返ると、最近まで、軍事・経済以外の研究展開が乏しく、政治史＝軍事活動史＋個人伝記として研究がなされてきたことがわかった。中国の学界では、山東・陝西、及び山西について、初歩的ながら現地主義による着実な研究が生まれてきている。

如上の研究状況に照らし、日本においても東洋史・中国史研究の蓄積を利用し、モンゴル統治下の華北について、地域を特定した政治史・文化史的研究を行おうと考えた。黄河流域をとりあげるのは、モンゴル帝国初期において、軍事上・経済上重要な役割を果たしただけでなく、古来政治戦略上の要所として位

置づけられてきていながら、これまで研究の蓄積が比較的薄いからである。また、2004年に現地を訪問し予備的調査を行い、現地の研究者と意見交換を行ったことによって、当地を対象とする研究が必ず成果を生むという目処がたった。

2. 研究の目的

本課題では、中国における現地調査と日本の機関所蔵資料(主に地方志と石刻資料)によって、黄河流域、特に河南省鄭州市・洛陽市附近の渡河点を有する一帯を対象に、宋～金～モンゴル帝国統治下における政治・文化政策の状況を探る。

モンゴル帝国時代の資料は、1990年代以降の中国出版ブームの中で、大量に日本にもたらされた。特に地方志・石刻資料の増大はめざましく、それらを整理し十分に活用できる環境を作ることが第一段階である。

そのご、中国華北関連の各種資料の中から、華北の中でも特に現在の済源市一帯についての資料をもとに具体的な検討を行い、13世紀におけるモンゴルによる華北支配の諸様相について、当時の政治システム、文化政策の実施過程を中心に明確にする。

3. 研究の方法

(1) 1990年以降出版の単行本・雑誌における石刻資料の記事についてリストを作成する。

対象はモンゴル時代を前後の時代と比較する意味からも、北宋(960年)からモンゴル帝国・元朝(1288年)の崩壊までとする。収録形態(拓影・転写・移録・記録・研究)とそのページ数、立碑場所・日時、収録書籍名、できれば、関連人物などについてまとめる。以前、図書館や文書館所蔵の拓本原物について調査を試みたが、個人には閲覧を許さない機関が多かったため、出版されている資料に限って網羅的に収集する方が能率的で、かつ今後の研究には裨益するところが大きいと考えている。そこで、本課題ではこれまでの石刻史料整理の伝統・手法(氣賀澤保規「中国新出石刻関係資料目録」(1)～(6)、『書論』第18号等所収)を継承しつつ、1990年代の学術雑誌所収の石刻記事について、データベースの作成を進める。

このデータベース作成にあたって、大学院生を雇用し、学内資料の複写と全体的な資料複写物の整理、及びデータベース作成の補助を依頼する。最終的などりまとめと整理・発表については、研究代表者が責任を持ち、データの公表については、日本所蔵関連学術雑

誌における未調査分が一定程度まで減少した時点とする。

(2) モンゴル帝国時代に限らず、宋代から現代まで幅広く、河南省済源市附近を対象とした地方志や石刻書及び先行研究について調査検討する。

明治大学図書館は中国の地方志コレクションにおいては東京でも何本かの指に入る。その関連資料を悉皆調査し通時的な考察を行う。同時に、自然科学の成果を利用し、植生・生態・地質・地形・風土・風俗などについて一定の知識を得、当地が古来重要な地点となってきた原因を追及する。

(3) 中国河南省済源市を中心として現地調査を行う。調査にあたっては、中国側と連絡を取り調査がスムーズに運ぶよう綿密な準備をする。

本課題の現地調査では、済源市・沁陽市及びその周辺の黄河流域における現地調査を行う。訪問先は、主に博物館や档案馆(文書館)、碑林(碑刻資料館)、仏教寺院や道教寺院である。それぞれの施設においては、遺跡の調査もさることながら、碑刻史料を中心とした調査を中心に行う。上記の施設の多くは文物管理处(行政機関)の管轄となっているため、当地の関係者・研究者との協力関係も築きたいと考えている。調査結果は、国内外の主要研究者・研究機関に加え、特に現地の関係機関に配布する。

4. 研究成果

(1) 中国で1990年～1999年に発行された考古学の学術雑誌所載の石刻のうち、宋代～元代にかかるものを収集しデータベース化した。『文物』・『考古』・『文物春秋』など学内所蔵の雑誌や閲覧の便のよい雑誌については早期にデータの収集を行ない、その後、アクセスのよい雑誌の調査を継続して、現在のところ約550件の史料を抽出できた。各年度末において、その年度における収集雑誌をまとめて校正を施していき、専門家の意見を聞いたが、ぜひ調査すべき考古学雑誌が現在も残っており、それらの収集を終えてから2009年度内の公表を予定している。

1989年以前の同類の調査については、氣賀澤保規「中国新出石刻関係資料目録」(1)～(6)(前出)が存在する。1990年代以降については、北朝から隋唐時代にかけての墓誌について詳細な目録が作成されているのに比して、宋代以降の石刻について、国内外において類似の研究は見られなかった。本課題に

における成果は、宋西夏遼金元時代史の研究者にとって、研究の便を提供することになる。

また、目録の作成過程で、それらが作成されなかった背景に、1980年代～90年代にかけての中国における学術出版状況の変化が大きく影響していることも見えてきた。近日、高橋継男『中国石刻関係図書目録 1949-2007』（汲古書院）が出版されたが、そこにおいても、1990年代、2000年以降のそれぞれに、新出石刻の紹介のされ方に変化が見られることがわかる。本課題で取り組んだ90年代の関連書籍の出版状況は、80年代までのそれとは異なるものの、依然、学術雑誌における発表の比率が大きいことが明らかになった。作成したデータベースは、その意味からも有用性が証明されたと言える。

2000年以降の同様の作業については、慎重さを要するため、別のデータベース作成の可能性についても探りたい。

(2) 黄河流域の歴史的地位については、『唐代交通図考』・中国公路交通史叢書などの歴史地理書や、『宋元戦史』などの戦争史関連書籍により、その時代ごとの変遷や普遍的に重要な地域・地点について調査・考察を重ねた。その結果、予備調査で仮定したごとく、現在の済源市・沁陽市附近、すなわち懷孟地区が歴代の孟津を取り巻く地域として重要であったことを再認識できた。

一方、モンゴル帝国時代史研究のうち、軍事・経済関係の論文、及び帝国全体の権力構造に関わる論文を検討していったところ、山西省南部と河南省北部の境界にあたる一帯は、モンゴル帝国時代初期の政治史にとって、極めて重要であることがわかった。それは、第2代カーンのオゴダイから第5代のクビライの時期にかけて、この地域に対する権益が変化・重層化していることが見て取れたからである。そのため、当地における政治・文化の状況が、華北地区を代表する施策に拡大していく状況が、より鮮明になった。

クビライの時代、政治にも文化にも関わる問題として、朝廷祭祀制度の整備が進んだことが指摘されている。本課題を進める中で、済源市の済流廟に深く関わる、国家的な岳流祭祀の様相についても検討を進めていくことになったが、済流廟に対するクビライやその他皇族たちの関わりは、モンゴル時代に特有の地域支配や祭祀の有り様を表している。今後はその点に注目して、元代の国家祭祀制度整備の状況について調査を継続していくつもりである。

併せて、岳流の祭祀の中でも、首都大都における状況を考察することは、地方との比較

の上でも重要であるため、大都における東岳祭祀の問題について、現在検討を進めている。本課題で明らかにしたクビライの懷孟地区における岳流祭祀の様相は、大都における検討にも重要なヒントを与える。大都の東岳祭祀については、2009年7月に行われる国際学会で報告を行う予定である。

(3) 本課題の中心に、河南省における現地調査を据えたが、それを実行したことで、研究の深化は当然のことながら、研究体制整備の面についても進展があった。

日本における調査の準備作業では、2004年の予備調査で得た史料を十分に整理し、短い日程で最大の成果が上げられるよう努力した。また、同じ河南省開封市にある河南大学歴史系の苗書梅先生に調査の協力を得た。具体的には、現地の文物管理处への予備的な連絡や通訳などの便宜を図っていただいた。そのおかげで、聞き取り調査を含めたスムーズな調査を行うことができた。

今回の調査で現存を確認できた金・元の碑刻は23件あり、2004年の予備調査の時とかなり保存状況に変化があることがわかった。また、聞き取り調査により、90年代からの済流廟周辺の碑刻の収集・保存状況や、壁に埋め込まれて確認できない部分にある石碑の本来の状態などについても情報を得ることができた。さらに、非公開となっている博物館所蔵の拓本の整理状況などについても情報を得ることができた。

現地における研究は、我々日本において利用できるような基本的な史料へのアクセスさえ有しない基礎的なものに止まっており、今回の調査中に、提供可能な主要書籍を提供したが、本課題の成果についても順次贈呈していく予定である。また、今後碑刻の整理状況に進展があった場合、その情報を提供いただくことになった。

目睹した碑刻には未発表のものもいくらか含まれており、中国のしかるべき研究者による早期の紹介・発表が望まれる。現存の碑刻の種類やその内容を帰国後改めて検討したところ、関連書籍の録文や記述に、さまざまなレベルでの問題があることが判明した。このような史料の精密さを深めるという意味において、まず今回の調査が果たした役割は大きいと言える。さらに、既刊書籍所収の記述でも、現地の文脈に置き換えて理解することで、(2)でも述べたような、オゴダイ～クビライ時期にかけての政治・宗教の様態がより鮮明に浮かび上がってきた。今後はまず、ひとつひとつの碑文の検討結果について、できるだけ、多くの場所で報告し、意見を得た

いと考えている。また、同地を訪問した他の研究者とも情報を共有しあい、研究に資する史料を見極めて、検討結果を公開していくつもりである。

(4) 本課題の遂行過程で、宮紀子『モンゴル時代の出版文化』が刊行された。同書の内容は、モンゴル時代の政治・文化に多方面からアプローチしたもので、本課題とも密接に関わる記述が散見された。そのため、当初計画にはなかったが、書評というかたちで、本書を検討した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 櫻井智美、「河南省済源市・沁陽市元代石刻調査報告」、『13,14世紀東アジア史料通信』、第11号、ページ未定、2009年、査読無
- ② 櫻井智美、「宮紀子『モンゴル時代の出版文化』書評」、『史林』、第90巻第3号、pp.116-125、2007年、査読有
- ③ 櫻井智美、「中国における蒙元史研究の現状と石刻調査の意義—元史学会参加及び北岳廟・隆興寺・済源市の石刻調査をとおして—」、『東アジア石刻研究』、創刊号、pp.32-9(逆99-122)、2005年、査読無
- ④ 櫻井智美、「『創建開平府祭告済澆記』考釈」、『元史論叢』、第10輯、pp.363-372、2005年、査読有

[学会発表] (計1件)

- ① 櫻井智美、「モンゴル帝国治下の漢地における中国的祭祀」、2005年度駿台史学会大会、2005年11月26日、明治大学(東京)

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

(雑文1件)

- ① 櫻井智美、「『慶賀蔡美彪先生八十華誕“元代民族与文化”国際学術研討会』報告』、『日本モンゴル学会紀要』、第39号、

pp.85-87、2009年、査読有

(関連発表1件)

- ① 櫻井智美、「アジア前近代史研究におけるフィールドワークの可能性」、明治大学教職員組合教研部シンポジウム、2005年5月13日、明治大学(東京)
(報告書は2005年7月25日発行)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

櫻井 智美 (SAKURAI SATOMI)

明治大学・文学部・講師

研究者番号：40386412

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし